

## ヘームスケルクがバンディネッリを模写する

— ヴァティカン宮ベルヴェデーレにおける両者の接点 —

東京芸術大学 越川 倫明

大英博物館版画素描部に所蔵される素描《ベルヴェデーレの彫刻庭園》(ペンに淡彩)は、教皇ユリウス2世によってヴァティカン宮ベルヴェデーレに設置された著名な「彫刻庭園」の内部景観を視覚的に記録した、現存するもっとも早い作例である。そこには中庭の中央部に据え付けられた2体の河神像(《ナイル》と《テヴェレ》)のほか、壁龕に《ラオコーン群像》と《ウエヌス・フェリクス》、その他3点の彫刻断片が、中庭内部の空間的位置関係を明示してスケッチされている。

本素描は1935年にA・E・ポファムによって16世紀ローマ派の逸名作者の素描として最初に公刊され、その後1987年にマティアス・ヴィンナーによりヘームスケルクの素描として紹介された。さらに近年になり1992年にローマで開催された彫刻庭園をテーマとするコロキウムにおいて、4人もの発表者(ヴィンナー、ネッセルラート、ウンチーニ、リヴェラーニ)が本素描に言及しており、その視覚的史料としての重要性が改めて強調された。きわめて重要な点は、本素描の制作時期が、1532年の夏(ヘームスケルクのローマ到着)と1533年7月(モントルソリによる《ラオコーン群像》の修復)の間という、非常に狭い年代的範囲に限定し得る、という点である。

このように本素描は、近年広く研究者に知られるようになった作品であるが、この素描の裏面にまったく性格を異にするもうひとつの素描、すなわち裸体の青年像を表したペン素描が描かれていることは、あまり知られていない。かつて発表者自身はこの青年像に注目し、ミケランジェロ素描にその原型を求めたが満足な結論にはいたらず、一方ネッセルラートは比較的類似した古代彫刻作例がモデルではないかという仮説を呈示した。

しかしながらごく最近になって、発表者はこの裏面の裸体像が、ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館に現存するバンディネッリ派の素描の正確な模写である事実を発見した。2点の素描の関係性を歴史的文脈に照らして考察するとき、きわめて蓋然性の高いひとつの魅力的な仮説が浮かび上がってくる。バンディネッリは、クレメンス7世治下のヴァティカン宮ベルヴェデーレに工房を構え、それを「アカデミー」と称していた。大英博物館の素描の表面と裏面は、ローマ到着直後のヘームスケルクがベルヴェデーレを訪れ、実際にバンディネッリの「アカデミー」にアクセスし、そこでイタリア様式の人体デザインを学んだ生々しい体験の記録なのである。

本発表では、両素描の関係性を軸として、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館の素描に対する評価、同時期のバンディネッリの動向の確認、ヘームスケルクの後年の版画作品から得られる考察などを加え、この仮説を検証していきたい。